
幻想組曲

之ち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想組曲

【Nコード】

N5091Y

【作者名】

之ち

【あらすじ】

夏の日のこと、明石海峡大橋にて連続飛び降り事件が発生。向かったのは一人の魔術師と一人の奏者。義足の奏者は荒れる海原で巨大な妖魔と対峙する。

第一章一話

七月が終わる頃、いつもの通り連絡もなしに唐突にその客人はやつて来た。

大阪の天王寺駅より南下した阿倍野との中間に一区切りだけ人通りの少ない通りがある。その通りにはぎちぎちにマンションが並んでいるが無意識のうちに誰もが遠ざかっているようだった。内一棟、外装は綺麗で新築に見えるマンションの地下へ客人の車は姿を隠していく。ボンネットの中からドラムを叩くようなエンジン音が響いていたが車体と共に消えていく。今日も三十五度の猛暑日である。車を日の下に置く訳にはいかなかった。

彼女の車が入っていったのは真っ白の外壁が目を引くマンションの地下だった。新築のように見える白い外壁は今年の春、ようやく耐震強化を終えた改築時に塗り直されたもので周囲とは格が違うようにさえ見える。だが車の行き着いた先は地上とは別物だった。地下駐車場は地上からとは全く別の世界を作り上げている。耐震用に補填された鉄骨がそのまま見えている。まだ工事半分で放置されているようにさえ見えるのだ。そして増えた鉄骨のせいで車一台分止められなくなっている。特に六十年代のアメリカ製車両にはその身体を収納するにはきつい。

ハンドルをさばき起用に停める。エンジンを切って出てきたのはOL風の女。髪は襟元まで黒のスーツとよく合っている。助手席に置いていた茶色の紙袋を持って地上へと続く階段へと向かう。

「エレベーター欲しいわね」

ほんの僅かな時間でも額に汗がじんわりと滲む。昨今の天候というのは地獄のような猛暑となっている。太陽の下にいれば蒸し物になってしまうような暑さ。彼女も同じだ、黒いスーツにも汗が滲みだす。せっかくの新品なのにと肩ががくりと落ちる。

彼女は目的の四階に着くとさらに奥へと向かって歩く。部屋の数

は少なく全ての階に三部屋となっている。その割になかは狭くワンルームである。ヒールがコンクリートを叩く音とセミの鳴き声だけが五月蠅く鳴っていた。薄暗く影になっている洞窟のような通路の最奥にたどり着くと間髪いれずに呼び鈴を鳴らす。そして一切の反応を待たずにドアを開けた。

まるで茶碗蒸しの蓋だった。ドアを開けた瞬間、これまでにないほどの熱風が彼女を溶かそうと噴出した。行き場を無くした熱風が吹き荒れたにすぎない。だが一息吸えば喉を焼こうとする風に息を飲むしかなかった。一旦顔を背けて息を整える。

「おはよう、悠」

現在、朝の十一時。すでにおはようと言う挨拶は相応しくない。挨拶の向こう側にあるのはフローリングが剥き出しになったワンルームの部屋。彼女の足元には靴が三足並んでいる。どれもロングブーツで黒色。気軽に出かけられるような靴はない。右手側のキツチンは新品同様で使っている感じはなかった。

「ちよつと聴こえてるの？」

少し大きめの声で部屋の奥に向かって言う。すると「聴こえてるよ」と関心無さそうな男の子の声が返ってくる。まだあどけなさが抜けておらず、いや幼さの抜けない女のように高い声をしていた。

四人も集まれば忽ち満員となるほどの部屋の奥に少年はいた。

部屋を速く歩いて一番に手にとったのはエアコンのリモコンだった。すぐに起動させると全開になっていた窓を閉める。どれだけ窓を開けていても風なんて吹いていないのだから関係ない。それでも少年は興味無さそうにしていた。

「笙子さん、鍵かけてないんだから勝手に入って来ればいいじゃないか」

壁には二本の人間の足を模した器具が並んでいる。床に腰を下ろして少年は愛用のギターに手を伸ばしていた。その少年、部屋の主である彼には脚がない。正確には膝から下が消滅している。壁にかけている義足がなければ立ち上がることは出来ない。笙子は義足を

一目見てから視線を落とす。少年、悠はギターの弦を張り替えている最中であつた。

「エアコン使いきないって言ってるでしょ、倒れるわよ」

「別に耐えられるよ。危ないって思ったら水も飲むし」

床に目をやればペットボトルが一本転がっていた。中身はあと半分程度残っている。エアコンが吐き出す冷気にようやく部屋の中で籠っていた熱が冷めていく。

「また背が高くなつたんじゃない」

悠は相変わらず床に座っている。立っているわけじゃない。見ても解らないはずなのに笙子には身体の成長は見てとれた。脚はなくとも成長はするものだ。

「そんなの良く解るね」

「当たり前でしょ、あなたの保護者なんだから、当然の事よ」

彼女の名前は笹塚笙子。少年の名前は長瀬悠。二人に血の繋がりはなく戸籍上も親子ではない。笙子は今年二十五になるが未婚である。現在は身元引受人として少年、長瀬悠の保護者をしているにすぎない。

「もっと伸びて欲しいけどね」

少年の身体はまだその歳ほどもない。膝から下が存在したとしても身長は百六十に満ない。もう半年もしないうちに十六になるというのに男っぽさはなく女の子のような背と容姿をしている。スクートを履いて外へ出れば男は気付かずに声をかけるだろう。

そんな悠の黒髪を撫でるとその手に持っていた茶色の紙袋に悠は目をやった。駐車場からの短いなかで底には水滴が溜まって色が変わっていた。

「それカルコサの？」

「食べたい？」

「もちろん」

カルコサは天王寺駅近くに最近出来たばかりの洋菓子店である。

店には珈琲も飲めるカフェがあり中高生から二十代前半の女性でい

つも満員になっている。いつだったか笙子が適当に選んで店に入った事があった。そのときに食べたチーズケーキが絶品だったため悠に買ってきたのがきっかけだ。

絶妙な甘味と程よい弾力感が調和して口の中に幸せが迸る。パイ生地は硬くチーズの部分と口の中で調和する。至高の一品が手ごろな価格で味わえる。

紙袋から取り出したのは長方形の箱とアイス珈琲。水溜りはアイス珈琲から出たものだった。ギターのネック部分を器用に太ももにかけて、箱の天井を開くとさっそくとばかりにチーズケーキを一つ取り出す。ふんわりとした生地が指の先で弾けると口にする前に笙子を見た。

「仕事？」

アイス珈琲は床に置く。透明のプラスチックカップには水滴が溢れている。

「そうよ。テレビがないから知らないのも当然ね。今度支給してもらうから見なさい」

エアコンの風の一身に受ける彼女は写真を一枚差し出す。ケーキはそのまま受け取るとその写真を見た。青い海が広がり緑の島とコンクリートのビル群を繋いだ巨大な橋が写っている。

明石海峡大橋

関西地方に住むなら誰でも一度は見たことがあるだろう巨大な橋である。本州と淡路島を結ぶ巨大な橋が写真には写っていた。悠もよく知っている改めて確認することはない。

「今、兵庫県で連続している自殺についてイザナギから調査依頼がきたわ。何でも同じ場所で自殺が連続して起きていて、たった二週間で四人。さすがに裏があると予測したって訳よ」

写真をよく見れば橋の中心でパトカーや警察が陣取っている。小さな豆のようなものだったがその服装や白黒パンダの車両が警察だ

と認識させる。

「自殺と僕に関係があるの？」

「単なる自殺なら悠の出番はないわね。イザナギも事件現場の確認を依頼しているだけなんだけどね。おそらく悠の力は必要になるわ」「なんでさ？」

「感よ」

笹塚笙子の感は良く当たる。彼女の場合、感というよりは予見や予言に近い。これまでに得た知識と経験からの推測は、より正確さを増していくと以前語ったことがあった。

「まあ場合によっては悠の力は必要ないかもしれないわ。だから三日くらい経ったら着くようにして。もちろんそのギターも万全にしてね」

ギターを指す。エレキとも木製でもない。形状こそギターそのものだったが赤と黒の二色で構成された禍々しいものであった。

この部屋の中で見える私物といえば義足とギターくらいな物だ。あとは作曲に使ったメモ用紙と文房具が散乱している分だけ。悠がギターを手にせずどこかへ出かける事はない。彼が生きていく上で必要なものだ。受け取って以来ずっと傍にある物である。

「当然、持っていくよ。でもなんでこんな依頼引き受けたの？ 確証はないんでしょ」

「贅沢は言っていない。ほら……こつちの世界じゃ卒業シーンが終わったばかりでしょ、だから新人の魔術師が多くてね。上から五月蠅いのよ、仕事はそつちに回すから笹塚さんにはこつちを願いつてね。それに、ここで点数稼がないと独立なんて夢のまた夢よ」

笹塚笙子、彼女の仕事は魔術師。魔術式を持ち寄り炎や風を起こす体現者。古来より神秘を起こす超常の者。傍から見れば綺麗なお姉さん程度にしか見えない。だが一度怒れば少々の天変地異を起こす。軽い気持ちでちょっかいを出そうものなら酷い目にあう。

一年と半年、彼女もまた魔術師の学院を卒業し新人の一人として

数々の仕事をこなして来た。一年に十人もいれば多いほうだが今年
は十五人と大量の術者が関西にやってきている。笙子にとつてはラ
イバルが増えるだけで自分の地位を脅かす脅威が増えたに過ぎない。
共に活動している悠も同じである。悠は歳相応の学校へ通う事は
なく彼女の手伝いをしている。少年は魔術師ではないにしろ、生ま
れ持った力で彼女の右腕として活躍している最中である。笙子より
後になるが昨年の秋頃より日本へやってきて活躍している。同業者
の目を惹きつける者として充分な働きを見せていた。

笙子の目的は事務所の設立にある。

現代の魔術師というのは世知辛い物で肩身が狭い。彼らの能力は
科学という技術にお株を取られその存在を映画や小説といった創作
物でしか日の目を見ないのだ。その魔術師たちの目的は個人又は集
団で魔術の研究を行なう場所を作ることにある。この世の中で彼ら
が大きな魔術を行う場合、専用の場所が必ず必要となる。笙子の場
合は個人の事務所を作ることにある。彼女自身が追い求める探求心
のためである。

だが笙子は悠が何をしたいかは聞いたことは無かった。

昔はともあれ現代では魔術なんて物はなくても人は生きていける。
すでに魔術よりも科学は発展しているのだ。空を飛ばうと思えば飛
行機を使えばいい。火を起こそうと思えばライターを、マッチを使
えばいいのだ。呪文を唱えて杖を振るう時代ではない。そんなこと
をすること事態、センスがない。

オカルトや魔術の時代ではないと彼ら自身も言う。魔術師たちも
火を起こすならライターを使うのだ。一々、呪文を唱えない。

しかし彼らが存在しなければならぬ理由もある。自然の摂理を
人類が凌駕する日まで魔術師達の存在は必要となる。

そんな魔術師たちはその土地にある支部、連盟に参加し仕事を
得る。笙子の参加している組織は今回の依頼先であるイザナギ。イザ
ナギは魔術師たちに情報を与える重要な機関であり関西魔術連盟の
地方組織である。

長瀬悠も現在はその組織に名前を連ねている一人である。

連盟は魔術師たちが規定に沿って判断し独立する権限を与える。魔術師が自分の魔術の発展を目指す。その時、他人に害が及ばないとは限らない。権限を与えられ公式に活動する術者は関西において百に満たない。事務所を持っているのは一部の成金や資産家が多いとされる。そういつた一部以外は自由気ままに仕事をこなしているにすぎないのだ。

事務所の設立には連盟より認可が降りる必要がある。笙子は未だ認可されていない。だが協力者たちの生活を優先した結果でもある。

まだ十五の悠が一人で生活できることが理由の一つである。

「それで場所は？ この橋の真ん中？」

「見てのとおりよ。淡路島。明石から船が出てるからそれに乗るといいわ。着く前に現場もみれるしね」

写真ともう一つ、彼女はパンフレットを渡した。赤いタコのキャラクターが笑っている画とフェリーの写真が載ったものだ。背景には大きく橋も写っている。いかにも人の集まりそうな場所で橋には多くの車が走っている光景が見れる。悠はこういった人の多いところは好きではなかった。

「海だとしても人が多そうだね」

「交通規制もされてるわ。船を利用するお客が多くなってるらしいわよ」

「好きじゃないな。他に交通手段は？」

「高速バスしかないわね。あと飛び降りには全部昼間に起きているから深夜に移動するのはなしよ」

悠は他人とともに同じ場所にいる事は好きではなかった。笙子は「あきらめなさい」と肩を叩く。彼らの仕事の大半は人気のない場所。自然に囲まれた農村やくたびれた廃村が主となる。また海や山の中といった自然のながが多い。確かに橋の下には海が広がり写真に写る淡路島の風景は緑一色の山だったが人の通りは途切れることはないだろう。

「じゃあ、私は先に行くわね。人と待ち合わせもしてるし」と言っ
て玄関へと歩いていく。

悠はそんな笙子に目もくれずパンフレットを見ていた。人の多い
場所には行きたくは無かった。静にしていたかった。かといって我
俣が通るわけでもない。そうしているうちに笙子は部屋を出て行っ
てしまった。彼女は土産と仕事の話を聞かせにやって来たにすぎ
ない。用事を終えるとそそくさと出て行ってしまふのも当然だった。
二人の間に必定以上の馴れ合いはない。

悠はまた一人になるとチーズケーキを一かじりする。甘いチーズ
の香りが口いっぱい広がる。やっぱりこの味だ、と感心しながら
目は写真へ向ける。その写真には上から下までいっばいに青が広が
っている。

アイス珈琲で喉を潤しチーズケーキの甘味に酔うと笙子の事はな
かったように再びギターの弦を張り始めた。

第一章二話

笙子が訪れた日から二日、悠はいつもの日常を繰り返していた。

昼間の間は部屋から一步も外へ出ずに新曲の作詞とギターの調整をするだけ。夕方の涼しい風が吹くとようやく義足をはめてギターと共に部屋を後にする。

一人向かうのは人通りのない河川敷。昼間は少年野球や散歩にやってくる人がいるこの場所も夕方頃にはすっかり途絶え悠一人きりとなる。頭上に見えるコンクリートの橋には車のエンジン音が忙しくなく流れていくが少年の姿に目を向ける者はいなかった。

ギターを掻き鳴らす。唄は歌わない。ギターはアンプも何もなしに音を響かせ自由に曲を奏でる。その音を聴くのは人ではなく川の中の魚や草むらに潜む小さな命だった。

三日という時間はすぐに過ぎた。その間、もう一人の尋ねてくる人物はどういうわけか来なかった。かわりに夜中になると「今、どうしてる?」「会いたいな」「私は今一人で空を見てるわ」と一方的な報告メールが届いたくらいだった。その受け取りに使っている携帯電話もまた支給された物の一部である。笙子のほかに悠を訪ねてやってくる者はいる。しかしこの暑さにまいつているのか来訪する事はなかった。

出発の朝は日曜日。青一色、雲一つない穏やかな日となった。気温もまずまずで時たま吹く風が半そでのシャツから入ってくる。笙子から渡されたパンフレットは明石からの出航となっていた。人ごみに紛れるのが嫌だった悠は出勤時間で混雑する朝を遅くに出ることで避けてから電車に乗った。

大阪の鬱陶しいビル群から緑が増えていく。たった五分もあれば景色は全く別の物となった。緑が流れ出してまたビル群、繰り返して変わる景色をぼうつと見つめたまま過ごした。

明石につくと港を指して歩く。すると青い海、瀬戸内海が目の

前に広がった。港は日曜だというのに乗客の数が少なく列を作つて並ぶ車もちらほらとあるばかり。笙子が言うほどのものではなかった。待合場所も十人に満たなようで繁盛している風には見えない。

悠が待合場所に入るなりその人々が無意識のうちに開いた入り口を見る。ギターケースを肩から下げ黒のジーンズとロングブーツを履いた少年の出で立ちにすぐに目を逸らした。ミネラルウォーターを一本自販機にて購入すると外へ出た。

中はクーラーが効いていたが悠にとつてみれば自然の風のほうが心地よかった。幸い影は多く日の下に立つ事はなかった。どこまでも続くような青天が視界を染め上げる。この場所でギターを弾ければどれだけ気持ちいいだろうかと思ひながら空を仰いだ。

しばらく経つと列を作つていた車が動き出す。悠も係員に従つて船に乗る。客たちを乗せた船が汽笛を鳴らして出航する。船の中では椅子が用意されているにも関わらず悠はそこでも風が吹く甲板にいた。懐から貰つた写真を取りだす。撮つた場所とは間逆の位置にいる。橋は巨大な姿を晒しておりその巨大な身体を車が何十台も移動している。それに比べ船のなかはがらだった。旅行者を乗せた船はゆつたりと淡路島を目指して進んでいる。

約四キロもある超大型の橋は微動だにせずどっしりと腰をすえてその場所に存在している。本州と淡路島を結ぶその橋の上を何十台もの車が途切れることなく走っている光景は悠にとつても壮絶なものであまりの大きさに圧倒される物があった。

列を成して走るそれらにぼんやりと意識は惹きつけられる。大阪で笙子が言っていたことを思い出す。連続して起こっている自殺の現場というのがその橋の中間にある。写真で警察が陣取つていた場所だ。悠は自然とその場所に目を向けるとじつくりと見た。テレビもラジオも持つていない悠はここへ来るまでに知つた情報は街頭で流れているニュースくらいな物だった。辛辣な顔をしたキャスターが哀悼の意を込めて話す内容はどれも同じように聴こえた。

自殺の方法は皆、同じ。橋の中央付近まで車で移動すると車を停

めてそこから飛び降りる。残った車には免許が残っており引き上げられた死体も一致していることからその点において不自然な場所はない。これまで自殺した人数は四人。すべての自殺で目撃者が存在している。だが誰も止めようとしなかったとキャスターは語っていた。

悠は青い空に目を向けようとして目を持ち上げようとしたが反対に落ちていく豆のようなものを捉えた。橋の中心から零れ落ちたその点は足元に広がる海へ一直線に向かっていく。ただその場所から下に向かって落ちる。

最後、悠の瞳にだけは海に落ちる直前で白い靄が見えた。

「……五人目か」

豆だと思っただけに見ていたものは間違いなく人間だ。おそらく海面に衝突した瞬間に死亡しただろう。橋の高さを考えれば生きて上がる事は万が一にも有り得ない。海面に衝突した時点で死亡は確定する。口にした直後、背後で悲鳴が聴こえた。

甲板に出ていたのは悠だけではなかった。スーツ姿の女性が一人そこにいた。彼女もまたさっきの飛び降りを見ていた。顔が青ざめてスカートから伸びた細い脚は震えていた。それでも悠とは違い彼女はすぐに携帯電話を取りだしている。

それにしてもさっきのはなんだろうか。不自然だ。まず昼間のこれだけ交通量を維持しているあの場所で飛び降りるだろうか。死ぬのなら交通量の低い深夜を狙えばいい。それとも誰かに止めてもらいたかったとでもいうのか。

理由はわからない。

「ね、ねえ。君も見たでしょ」

電話を終えた彼女が悠に向かってやって来る。笙子とは違う長いポニーテールが風で煽られてよく揺れている。

「見たよ」

「君、なんとも思わないの？」

あまりにも関心のない言い草だったため顔を覗いてくる。前髪に

隠れた悠の瞳は黒を映し出し中心に青い点を映していた。人の目とは変わった色だったが女性にはその色を見ることが出来なかった。ただ関心のない瞳だけを彼女は見た。

「そんな言い方って」

「なら落ちるとき白い靄は見えた？」

「なんのことよ？」

無関心な少年の言葉に対しどこか怒りにも似ている口調でもあった。それほどまでに悠が無関心に見えていた。事実、彼に自殺を図る人間に情は持ち合わせていない。

「どれだけの事があっても自ら命を絶つのは許せない。

「別にあんたが気にするようなことじゃないか」

よほど気に障ったのか、かっとなって目を見開いた。怒る彼女を見て悠はよく見れば綺麗な人だなと感心する。しかし他人の生き死、それも自殺に首を突っ込んでどうしようと言うのかと冷めた気持ちも同時に湧く。目の前にいる女性にはさっきの死が飛び降り自殺以外のものには見えていないはずなのに、と心の中で思えばかりだった。

「そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ」

怒ることをやめて女はそう言った。二人とも口喧嘩などしている場合ではないと距離を置く。

無言のなか、橋の上では停まった車を見つけているはずと思う。じきに警察がやって来る。なにもここから連絡する必要もない。笙子からの連絡では橋には一日数回の見回りが出ていると知らせもあった。海に落ちた人もすぐに引き上げられるだろう。

「気にしないさ。僕はあんな死に方はしない」

素気なく返す悠。女から目を背けて海と空が広がる光景を視界に入れる。

(さっきの白い靄……あれは……)

これまでの半年で嫌と言うほど見てきた靄と同じ形をしている。もし彼女にそれが見えていたなら少しはおかしいと言うはず。なの

にそれはなかった。だとするならばギターケースに意識を促す。ケースの中で張り替えた弦が撓る。笙子の感はどうやら正解だったようだと言識が高まる。

「私、行くわ」

悠は答えなかった。自分のすべきことを捉え見つめる先には青が広がる。潮風と太陽が交差し目的の島が前方を埋め尽くす。

(そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ)

さっきの言葉がなぜかよぎった。彼女の言葉に想いを巡らせたが自分のために悲しんでくれる人がどれだけいるだろうか。

まあ笙子さんくらいは損をした程度には思ってくれるだろうけど。それだつて損得勘定でしかない。律先生に申し訳ないとも思つかない。返事の返つてこなかった彼女の表情は曇っていく。しばらく橋の方を見て船内へと戻って行った。

第一章三話

橋を後にし淡路島に近づくと船が一度大きく揺れた。ケースの中でまたギターの弦も揺れる。もう一度、笙子の感に間違いはないと確信する。

かなり距離はあるが現場を見られたのは好都合。ギターの弦が震える様が手にとってわかる。あれが本人の意思で行われた自殺ならこつはならない。ギターを取り出す。遅かれ早かれ必要になる。あれは笙子さんじゃだめだ。いずれ白い靄は物体となつて現臨する。久しぶりの大仕事になるかもしれない。

船は一度大きく揺れはしたもののその後はたいした揺れは無かつた。大きさは違つたが誰も異常に思わなかつた。何より無事に淡路島の港へと到着した。潮の香りが散漫した漁港が続く。見上げると大きな山が視界に入る。民家はまばらでアパートやマンションのよくな集合住宅は見られない。

「遅かつたじゃない、悠」

港、といつてもコンクリートの駐車場が広がるばかり。その駐車場のはずれ、送迎用の列から笙子がやってくる。随分と待っていたようで手にはペットボトルがあつた。中身はもうほとんど無いみたいで容器の中で跳ねている。彼女は田舎でも黒のスーツ姿で悠を迎えた。その姿が周囲とかけ離れていた。

「おかげで一つ見れたよ」

「こつちも連絡を貰つたわ。もう警察が動いている、あら……イザナギの子と一緒に乗ってるはずだけど知らない？」

周りを見回す。悠の背後に近づくと一人の女に向けられた。悠が振り向くと女があつと驚く。さつき甲板で話していた人だつた。驚きの顔はしたもののすぐに仕事の顔へと変化する。

「笹塚笙子さんですね、イザナギより参りました。四条彩です」

魔術師が仕事の依頼を引き受ける際、事件の報告と現地での行動

を支える特派員がいる。毎回、地域と事件の内容によって特派員は変わる。これまで笹子が出会ってきた彼らはかなりの数だったが四条彩とは初めてであった。

「はじめまして四条さん。こっちは私のパートナー長瀬悠よ」
ちよこんと頭を下げる悠。

「さっきの……」

再び会う二人。甲板でのやり取りに四条が先に謝った。上下関係は彼ら魔術師たちのほうが上になる能力の有無が一つの壁を作っている。悠からすればそんな事はどうでもよかったが彼女の場合、そうはいかない。

「さっきはどうも。長瀬悠です」

「うそ、若いつて聞いてましたがまだ中学生じゃないですか」

確かにそう見える。年齢もばっちりあっている。生い立ちを知らないなら当然。しかし本人はもうこの手のことには慣れていた。

「大丈夫よ。イザナギだって悠の力は認めているし何より今回の相手は私より悠のほうが良いはずよ。ねえ？」

笹子も今回の件を気付いていた。悠へと視線を動かすと言葉の意味を理解してうなずいた。今回は魔術師に出番はない。必要なのは別の力である。

「それじゃあ、海月荘へ行きましょう」

「それどこ？」

「現地の協力者が用意した元民宿よ」

送迎用の車を作る列。その中の一台、一番みすばらしいワゴンR。タイヤ周りは泥まみれで随分と洗っていないため付着した汚れを全体に纏っている。そのワゴンRの傍で男が立っている。三人が近づくと小太りの中年はタオルで汗を拭きながら礼をした。

「どうも遠いところを」

「現地協力者の日高さんよ」

「イザナギの四条です。いつも協力ありがとうございます」

四条の礼に伴って悠も礼をする。魔術師のサポートは大半が一般

人である。都市部だけでなく離れた地方にも多くいて彼等の仕事に携わっている。といつても魔術師たちのサポートは寢床の確保や物資の補給などで直接戦闘に関与することはない。それぞれの役目をまっとうするためにいるのだ。

日高の車に乗り込むとワゴンRはタイヤを軋ませた。軽い三人の体重でもこの車には非常にきついものだった。しかしながら小さなワゴンRの中は冷房が効いていて涼しい。空からの光を遮るものもないこの場所では最高の場所となる。コンクリートの港を出て海を横目に車は走る。窓をほんの少しだけ開けると潮の風が車内に入り込んでくるのが心地よい。

「見てきたんでしょ？」

助手席から後部座席に座っている悠へ振り向きながらに笙子が言った。車内全員、なにをと聞く者はいない。悠は首を縦に振る。

「どうだった？」

笙子も見当はついているのだ。

「不自然だったよ。これまでの自殺がどうか知らないけどあれは…

…」

「妖魔だった。それもかなり大きいよ」

にっこりと微笑むと身体を前に向けて話を続ける。

「まだ実体化は先だよ。でも放っておくとまた死人が出る」

「これまで自殺した人たちの経歴を調べるといくつか面白い点があつてね。それについては話すほどのものじゃないけど聞く？」

「べつに聞きたくないよ。それにもっと近づかないと解らない事が多すぎる」

落ちる様だけを見ていたに過ぎない。だが現場で見た白い靄。隣りで話を聴いている四条彩には見えなかったあの靄こそがこの先、何が起きるか予想できるひとつである。あの靄はいずれ実体となつて現れる。

「さっそくで悪いけど現場を見たいんだ。船は出せる？ 小さいやつでいいんだけど」

言い切るとちょうど車が停まる。信号は赤だった。港から続く小さな町がすぐ傍にある。今度は運転していた日高が口を開いた。

「そりゃ無理やな」

一人、度のきつい関西弁だった。ルームミラーで日高と目が合う。彼は肘をドアに引つ掛けて信号の色が変わるのを待っている。

「イザナギの仲間から連絡が入ったんやけど、さっきの被害者を引き上げるとか何とかで漁師も一般人も船はだされへんねん」

やはり警察はもう動いている。遺体の引き上げが優先されると言うわけである。

「少し離れていてもいいから、現場が見たいんだ。自殺はこれで五人目、あれが現臨する前に仕事を終わらせられる可能性だってある」

あの場所に近づかないとこちらも打つ手がなしとする悠。

「せめて橋の上に出て現場を見下ろすくらいはしないと……確かな位置さえつかめない」

「無理を言っではいけませんよ。こちらにはこちらの事情というものがあるのです。イザナギにはイザナギの。警察には警察の、というふうな。ですから長瀬さんの事情もわかりますけどここは我慢です」

と、几帳面というよりは真面目な返し。

「四条さんの言う通り。今日一日くらいゆっくりして明日から動きましょ。必要なものもあるでしょ？ 新しい義足も届く手はずは出ているわ」

皆して待つ的一点張り。悠としてはすぐにでも海に出たかったがそれも仕方なし。笙子は相変わらずのんびりで夏のバカンスを愉しんでいるにすぎない。人の命に関わるかどうかよりも仕事はさつとこなした方が良くに決まっていると悠は窓から映る海に目を向けた。こんな事だから事務所は先になる。そう思うも少年は告げられなかった。

「わかったよ」

あきらめるしかない視線はまた窓の外。大阪とは違う。昼間だ

というのに歩いている人は少なく、数人の歩行者も港へ向かっていくばかり。誰もが肩に釣り竿を掲げていた。再び動き出すと景色は随分と変わって山の中へと入っていく。緑の色が全面に現れてくる。橋の姿はまだ映っているが道路の様子は見えない。

「でも驚いたわ、仕事熱心なのね。もつと冷めてるかと思っていたわ」

外を眺めていた悠に彩さんが言った。なぜ、と問うと彼女は口を軽快に動かしてはじめた。

「だって船で会った時、どうでもいいって感じに見えたんです。それにこれまでイザナギへ集められた調査レポートに載っている悠君の人物像を考えるとそういう印象を持たなかったもので……」

「それもそうね」

笙子が頷いた。彩の手荷物はノートPCが入ったケースとハンドバッグ。これまでの特派員も同じように同じノートPCを持っていてレポートを書いていた。悠が何度も見た彼等協力者の姿である。彼女たちの仕事は戦闘ではない。あくまで事件の内容を詳細にまとめる事。そして事件の内容には担当した魔術師やその他の現地協力者の事柄も含まれる。その他に事件の終了と共に魔術師たちにも調査レポートの提出を要請する。魔術師がイザナギへ提出し二つのレポートが揃った時点で事件は幕をおろすことになる。

その後、連盟本部の京都にて事件の内容を鑑定し魔術師の評価へとつながる。

ただ、いつも笙子が引き受けて書いて提出するため悠は自分の事をどう書かれているか知らない。またそれを読んだ事もない。

「ちょっと安心しました」

「そう」

やはり素気ない対応である。後ろに見える港町には活気はなく人気はないように感じた。事件が発生したため海に出ていた船も戻っていく姿が見えている。車の量もやはり大阪とは比べ物にならない。車はゆっくりと山を登っていく。およそ人の入る場所ではない山道

を車は登っていくことになる。地面も整備されていないからガタガタと揺れて下を噛みそうになるほど。

車内から後ろを見ると青い海が姿を現れる。ほぼ一面、青でその下にうごめく影がいることなど思えないほどに清く美しい光景だった。

橋の姿も捉えることが出来る。橋の下の現場へと船が向かっていた。港へ向かって戻る船とは違い二艘のボートは橋へ密着するように視界から消えていった。おそらくあれが警察の船だろうと見る。あと一時間もあれば悠と彩が見た死体は引き上げられる。これまで飛び降り自殺で死亡した人間は発生から二時間以内に見つかつていく。どれも橋に身体が引つかかるようにして浮いていた。

一度、大きく車体が揺れて全員がどつと浮いた。「着いたで」

日高は語尾を大きく強調するような物言いをして車を日陰に停めた。悠が視線を前に向けると雨や泥で汚れた看板に海月荘となんとか読める名前が書かれていた。

「ここが海月荘なの？」

「そうよ。どう？」

どう、と言われても見えるのは車二台分の駐車場……もとい木によつて出来た日陰。先に停めてある一台は軽トラック。軽車二台で埋まってしまっている。まあ起用に動かせば軽トラックも出られるだろうという程度。

山中を無理やり切り開いたような場所には一軒の家が建っているに過ぎない。日陰から家までは歩いて数歩程度の距離しかない。家も木造で古い。溜め息が自然に出るほどのボロさである。

「どうもこうもないよ。なんだ、いい物あるじゃないか」

車内から出ると軽トラックの二台に水上バイクが目に入る。黒く鈍い光を放つまさしく新品。それはこの場所において一番、新しいものだった。

「用意してもらったのよ、二人しか乗れないけどスピードもでるわ」

「最新式だからはつええぞ」

にやりと笑って玄関に鍵を差し込む日高。こんな場所に鍵をかける意味は果たしてあるのかと疑問もある。外の熱さは変わらない。だと言うのに家の中は涼しく風が吹いていた。悠の部屋とは別物で風は途切れず熱も籠らない。

「よかった、窓を開けといて正解だったな」

すると「でしょ」と親指を立てる笙子。「この二階で待ってたんだから」と中へ入る。狭い玄関をくぐる。靴はなくここには日高さん以外にはいないと知らせていた。

「さあさあ上がってください。どうせ誰もいないんで気楽にしてくださいよ」

すでに三人は階段を登り始めていた。全員、手荷物は少ない。悠も唯一の荷物であるギターケースを持ってあがる。木造の階段はため足を進めるたびに床がきしむ音が出す。古い建物だというのは外から見ても解る通りだった。

「壊れかけるところもあるんやけど大丈夫やで。床が抜けるなんてないから」

ぎしぎしと音を立てながら二階へと進む。海月荘のなかは太陽の光を漏らさぬようにとどこもかも輝かせている。古いというが埃はなくこまめに掃除をしているのが良く解る。

階段を上ると左右に部屋が分かれている。家の中心にある階段はまるでセンターラインのように設置されていた。廊下は短く両方の部屋は話し声が聴こえるほどであった。

扉は閉められていなかった。左の部屋には笙子の荷物が置いてある。

「悠はそっちの部屋ね。四条さんは私と一緒に」

彩が「はい」と元気よく返事をする。そのまま後ろに回ると彼女の肩を掴んで部屋へと連れて行った。そういえばと悠は笙子の後ろ姿を見て思う。笙子は男女関係なくモテる。どういうわけかイザナギの特派員には彼女のためにと自分から名乗りを上げる人がいると

聞いたこともあったほど。普通、魔術師は気難しく相手をしたいは思わないはずなのだ。

「そんじゃむしろ行きましょ。こっちですよ」

わざわざ案内する必要もないというのに日高は悠の前を歩いていく。ようやくやって来た部屋は殺風景な八畳間。一人でいると広いと感じる部屋には小さな机と布団だけが用意されていた。押入れもあるが使う必要はなさそうだ。

丁度、陽の光から外れた角がある。ギターケースをそこへ置くと全て終わる。荷物は唯一このギターケースだけ。隣りにある窓は開いており風が流れて入ってきていた。大阪と違って潮の香りがする。あのコンクリートの焼け焦げるような匂いはない。しかも先ほど車から見えていた明石の海が広がっている。絶好の場所だった。

「それじゃあ、わしは一階にいるんで落ち着いたら来てくださいね、美味しいお茶もあるんで」

部屋を出て行く日高に「はーい」とまるで子供のように笙子は手を挙げて答えていた。彼は笑いながら一階へと降りていく。また階段の軋む音が聴こえる。

一人になったといっても廊下の先にある笙子たちがいる部屋は丸見えだった。彼女たちからは窓の外を見る悠の後姿が見えている。

外の風景から机に目を向けた。これまでイザナギの関係者がここを使った痕跡は随分と残っていた。机には引き出しがあり中にはたくさん紙が入っていてめいっばいに文字が書かれている。おそらくこの部屋で様々な計画を練った証明である。ここで仕事をするのは初めてというわけではないのだ。

魔術の専門知識は少ない悠でも解るほど奇怪な文章と文字だった。それらをしまつて再び外を見る。海に出ていた船が動き出していた。あの警察の船だった。橋の影から出てきた船には白い布のようなものが敷かれていた。そのまま明石のほうへ向っている。どうやら警察はさっきの遺体を見つけたようだ。

第一章四話

海月荘の一階には風呂と台所など一般家庭と変わらない設備がある。しかし民宿としての施設らしき物はこの建物ぐらいな物であった。木造であるが部屋は多く一階には他に部屋が三部屋ある。どの部屋も八畳ほどあり団体を迎えても問題なさそうに見える。

事件の内容を聞くために四人は茶の間に集まっていた。畳張りの部屋は広く四人いても半分も埋まらない。悠の住んでいる部屋と違いかかなりの大部屋である。彼らのほかには一時代、昔の雰囲気のかなでノートPCとプリンターが存在している。

「どの人物も橋の中央付近まで車で走行し、そこから飛び降りるといった行動に出ています。遺体の回収はされているようですが中には損傷が酷く本人確認が非常に困難だった人もいるようです。ですが車の中に免許証が落ちていたり本人が所持していたりと手がかりは豊富だったと報告されています。ああ……また精神的に病んでいた方もいますね」

わんさかと情報がプリントアウトされていく。イザナギのほうで回収したデータが机で広げられていく。履歴書のように写真と経歴が記載されている。四条彩のPC内にある情報は彼女の性格どおり几帳面であった。一枚を手にとって見るが特に変わったところはない。悠の见ているデータは大学を出たあと一般企業に就職したとされる男性のものだった。備考の欄には借金で苦しんでいたと書かれているが返済が滞ることもないと記されている。

「自殺全てが奴らの仕業じゃないよ。絡んでいるのは間違いないけど別の何かがある」

「わかるの？」

「なんとなくね、妖魔があんなふうに気取らせるなんてのも珍しいんじゃないかな」

現場に出ればもつと確かな事が解るといふ考えに違いはない。笙

子や悠が奴らと言つのは誰であろう事件の首謀者にして元凶。妖魔と呼ばれる怪物。今、ここに笙子と悠がいる理由。

「別の何か……まさか魔術師が絡んでいる？」

「ここへ来た時からあの場所を日に三度は見たけど魔術式の類はないわ。そつちは私が保証する。なによりあれだけ巨大な橋になるとそれ自体に必要な魔力も膨大なものになるわ」

明石海峡大橋は全長約4キロ。日本でも最大クラスの巨大な橋。それも地上から離れ海の上という立地条件。いかほどの魔術師といえどこの場所を意のままにすることは不可能に近い。

「まして特定の人物を誘い出して自ら飛び降りるようによつと思つたらとんでもない力になる。網を張るなら一人ではなく複数で行なう必要があるわ」

笙子自ら魔術師の存在を否定する。こちらへ先にやってきていた笙子が何もしていないはずも無い。彼女にできる事は全てしている。「それでは一体？」

悠は「さあね」と呟いた。何がどう絡んできているのか詳細は不明で手元を集められている死亡者のリストも今のままでは意味がない。自殺というのは人目に付かない場所を選ぶのが普通だ。人知れぬうちに山に入ったり崖から飛び降りたり。最近では集団自殺もあるようだ。今回の件は違う。何よりあれだけ目立つ場所で飛び降りるのはどうだろうか。学生なら馴染みのある学校の屋上から飛び降りるということもありえるが被害者はどれも社会人。しかも中には毎日のように仕事で通行するだけの人物もいる。彼らにとつてあの橋は日常の道でしかない。そのような場所でなぜ死ぬのか。答えは出せなかった。

「なんであそこを選んだのかな」

何気なく声が出ていた。

「解らないわよ、死にたいけど止めてほしいって人もいるでしょう。そういう人からすればああいっただ人の行き交いが多い場所は絶好の場所になるんじゃない。普通なら、ね」

橋の上は高速道路になっている。もしあの場所で飛び降りようとしているのを目撃してもそこで車を停めてわざわざ飛び降りをやめさせようとする人間がどれ程いるか。考えてみてちよつとした絶望を悠は感じた。走る車の速度は八十キロ以上の高速だ。他人の行動に気を回す人は少ないだろう。

実際、五人の飛び降りには誰も止めてはいなかった。

鬱そうとしたなか、日高がテレビをつける。まだブラウン管の箱状モニターが映したのはここから少し離れた場所だった。橋の上からへりで撮影している。二階に出れば窓から見える景色とそっくりだった。アナウンサーの声がテレビから流れてくる。

机の上ではこれが限界と三人もテレビからの情報を耳を澄ました。画面には海が映り橋の下で警察の船が移動しているのが見える。その映像の中、黒い影がぼつりと映り込む。笙子と悠だけが解るものだった。日高と彩は何事もなく見ている。

橋にはガードレールの傍で停車している車が映っている。死亡した人物の車だろう。黒い影はその車からすぐ傍で濁りのように染み付いている。カメラが離れる瞬間、その影もまた移動する。

事態は急を要する。携帯電話を取り出した彩がイザナギへと連絡する。話しの内容は詳しくする必要はなかった。画面に映る情報を見ていた人物はここ以外にもいる。電話の先も同じ映像を見ていた。「それではお願いします」

彼女が話を終わると悠たちに言った。イザナギは今晚一艘の船を現場近くまで出す。妖魔の出現は関係なくあれを止めるというのだ。先の飛び込みから二時間もなく二人目が飛び込んだ。この後、橋は厳戒態勢となる。

「せめて慧が来るのを待つてほしかったわね」

笙子が言う。遅かれ早かれ悠の頼みは叶えられる事となった。でも海に出られればそれで事は済む。

大事なのは相手と同じ場所に立つということ。

人ではないものであっても。

四人は船が出るまでの間、それぞれ適当に時間を潰す。時間は三時間。悠は一人、麓まで降りてみたいといつて出て行く。青一色だった空はねずみ色の雲が覆い被さってきていた。降らなければいいかと願うがそれは無理なようだ。

道に出ると港を目指して歩く。突如として携帯電話が震える。取り出すとメールの受信だった。開くと「台風が近づいてるよ」と短い文章が現れる。

「大丈夫、解ってるよ」

空を見上げて呟いた。昼間、ここへやってくる時の青天は既に消え空の半分はすでに雲でいっぱいになっている。いつ雨が降りだしてもおかしくはない。ようやく着いた港には波が押し付けていた。風は強く吹きこれからの出来事を物語っているかのようでもあった。

夕方になるともはや太陽の姿はなく雲が世界を覆っていた。遺体の引上げ作業を終えた警察は海から姿を消して今は対岸にいる。橋の上では停まる車がないかずっと監視が続けられている。曇天となった空はいつ降り始めるのか、船が用意されるなかで悠は見つめていた。黒と灰色に覆われている不吉な色をしている。波は高く周囲には悠達以外に人はいない。嵐の前の静けさに皆、危険を感じて家に籠っている。空が曇ってきた頃、丁度悠が港に出た時にイザナギ本部からという名目で明石から四人乗りの船を一艘をやってきた。海月荘にある水上バイクでは二人しか乗れないためこちらにする。少し笙子が落胆していた。彼女の場合こういった船よりバイクで颯爽と走りたかったのだ。とはいえ二人を乗せた船はぐんぐんと波を掻き分け進んでいく。海の青は雲の濁りを受けて黒く光を失っていた。船の舵を取るのには日高である。彼は荒れる海を速度を保ちつつ殆ど揺れさせずにいた。

「さすがですね」

髪を抑えて先頭に立つ。風も水しぶきも全て受けながら彼女は言った。

「俺も昔は猟に出とったからなー」

一般の船、それも五人も乗ればすぐに誰かがはじき出されそうな大きさをしている。加えて海の荒れは益々強くなるばかり。橋の付近へ近づくのは危険だと知りながら、ゆっくりと近づいていく。笙子と違って悠は足元がおぼつかない。なんとかボートから振り回されないようにとしがみついている。

「弦は震えてる？」

気付かなかった、笙子は悠の脚よりもその力へと目を向けていた。無理もない。笙子は悠になにも問題ないように見えていたのだ。ギターは港から出る前にケースから出している。そのギターには全くといっていいほど反応がない。首を振って伝える。昏間、ここを通ったとき弦は確かに震えた。今は波とは正反対に落ち着いている。少年の心は震えていた。

「もつと近づいて」

言葉どおりにもつと、もつと船は進んでいく。その度に波はきつくなつていった。すでに現場との距離は十メートルもない。すぐ傍に自殺した人間の身体が落ちた場所がある。首を曲げて見上げれば天空まで届きそうなほどに巨大なコンクリートの柱が立っている。ギターに相変わらず反応はない。船に乗ってやってきた時、ここから随分離れていたが感じた気配はなかった。単にここには居ないという事なのか、少年の瞳は周囲に向けられた。

一度、船が停まる。気を静めてギターを構える。足を踏ん張ればどこにもつかまらずに立てるようだと言った。心を落ち着けてそつと相棒を抱く少年はその意識を海底まで落とす。

瞬時に僕の魂が弦を震わせた。

「やっぱりいる」

ボディに流れる赤がじんわりと光を帯びていく。悠の鼓動とギターの鼓動が同調する。船の周囲には物体による衝撃ではない自然のものとは違う波紋が広まる。膝から下の義足は意としないところで耐えていた。震えが膝に伝わる。しかし意識はもつと下に落ちていく。すでに少年の心はここにはない。

膝から義足へ、義足から船へ……そこから蒼い海の底、黒い闇の底。

意識の落ちる先に波のうねりはない。海底は非常に穏やかで船のある水上とは違っている。身体が自然と動き指が弦に触れる。どんな音かはさして重要ではない。鼓動にあわせて音がなる。単なるひとつの響きが連続で鳴りリズムを刻む。

「はじまったわね」

ギターの音はアンプなど一切の道具をなしに奏でられ音はまるで空気を背に反響する。波の音など全てかき消すしなやかに彩られた音。途切れないように紡いでいく。指は思考とは別のところにある。「この辺りを回ってみて」

弦は指とは別に揺れている。だが一向に目的のものは見えずついに。船が再び発進すると瞳にぼんやりとした蒼が浮かび上がる。

いつもと同じだ、問題はない。

海の中では魚がこの場所を避けている。一切の生命が消えた。場所はある。そう全ていつも通り。だが義足に違和感が走った。無機質な単なる物がひびの入ったような崩れた音を立てる。いつもという全てが一瞬にして崩れさった瞬間。

それこそが発端だ。

同時に船に振動が起きる。岩にぶつかったような激しい衝撃。

繋いでいた意識が完全に途切れる。海底から海上まで一瞬で戻ってくる。並行であったはずの視線はゆがみ右側へ傾いていた。身体から義足が外れている。そればかりかはずれた義足ごと悠の身体は船の上にはなかった。

「悠！」

宙に放り出された悠がようやく事態に気付いた時、笙子は叫んでいた。手を伸ばしていた彼女の姿から遠ざかる。悠は自分よりもギターを優先して放り投げる。手から放れると赤く宿った光は消えていく。笙子がギターを手にしたのを確認できただけまだマシだった。義足から離れた身体は襟を掴まれる。強力な力だが姿は見えない。

力で無理やりに引き込まれる。悠の身体は軽く貧弱である。肉体面においては外見同様少女並み。その力に抗うことなど出来なかった。笙子と目が合う。その直後、瞳は蒼に包まれた。

冷たい海水に身体が溶かされていくような感覚ただ引きずられて底へと落ちていく。今度は意識だけではない。身体も一緒だ。義足が外れていたのは幸いだ。再び海面に上がるなら腕だけで泳がなくてはならないのだ。義足が付いたままだったなら重くてとても泳げない。悠の目には義足が落ちていく様が見えた。海底の底にある砂がふわりと巻き上がる。

最後の一瞬で吸った空気も長くは持たない。まるで錘のようになつた悠を落としていく。誰かが引き上げない限り悠は海面には戻れないだろう。なら、と瞳を凝らす。先の事がある。必ずいる。

「さあ一緒になりましょう」

ここは海底、魚一匹いない。深き黒の世界。上から見れる青い海など存在しない。ましてや声などかけられるはずもない。

「かわいそうな子……まだ若いのに」

人が言葉を話せるはずはない。なのに悠の前に現れた女は声を出す。

全身が蒼のなかでもはつきりとわかる。長い髪は足の先まで伸びていて半身は焼け焦げていた。顔は青ざめて頬の肉が削がれたようになくなっていく。そのくせ瞳はやけに美しく生きているような輝きを見せている。

「あなたも一緒になりましょう」

脳に響く声だった。そればかりか黒く燻った腕が伸びてくる。悠の瞳に恐れはない。腕に掴まれる前に息が持たなかった。空気を求めて口が開く。しかし入ってくるのは海水ばかり。すでに意識は朦朧としていた。

少年の身体は限界を迎える。吐き出した息の泡が昇っていく。薄れていく意識の中、遙か空へと伸ばした腕を女が掴んだ。半身が焼け焦げた女ではない。まぎれもなく実体であり生きている女の手だ

った。暗闇の如く光のない海底で人の暖かみに繋がれた。だが掴み返す力などなく悠は意識を失った。

第一章五話

溺れた悠を拾い上げて数時間が経つ。海はますます荒れ雨が降り風は強くなっていた。台風之余波はすぐそこまで迫ってきている。

海の底へと落ちていく悠を引き上げた時、意識はなかった。僅かな時間ながら悠の身体は芯まで冷えきっていた。笙子は日高と分かれ一人、海月荘へと戻った。倉庫からストーブを取り出すとすぐに悠を暖めた。外傷はないように見られ死を免れたが意識は戻っていない。今はただ静かに眠っている。

「手間のかかる子……」

眠りについていて悠の額をさする。

「笙子さんは大丈夫ですか？」

海に入ったのは一人ではない。海底近くまで追いかけた笙子もまた同じ。シャワーを浴びてきた彼女に四条彩は茶を淹れて待っていた。海に残った日高はまだ船を港にしまっている。今、海月荘には彼女らしいない。そのためか、笙子はバスタオル一枚で過ごしている。

「私なら問題ないわ」

腰をおろすと無防備な身体がふんわりと揺れる。彩は彼女の身体から視線を外した。同性でありながらもその色香に頬が赤くなるほどに笙子は魅力的であった。しばらくはラフな格好でいられる、という安易な考えが周囲を惑わせる結果になる。

「でも悠が意識を取り戻すまでなにもできないわね。義足も落としちゃったみたいだし」

義足は海の底にまで落ちていて。悠を助けた時、義足は後回しにした。引き上げる道具もなかったため仕方がなかったのだ。回収するには台風が過ぎ去るのを待つしかない。それには二日以上かかると思われる。荒れた海の中で回収など出来るはずはない。

悠の容態は変わらない。笙子は服を着ると彩と一緒に一階へと降

りていった。居間へと移動するとテレビをつける。ちょうど気象情報映っていた。現在、兵庫県南部に迫っている台風はあと三時間ほどでその暴風圏に入るとされる。テレビではレポーターが徳島で暴風の中、実況していた。

「強そうですね」

「早く通り過ぎると思ったんだけどね、やっぱり当てにならないわ」
呟く彩。あの台風が去るまで義足の回収は不可能だ。笙子が引き上げる時も海は逆巻き唸っていたのだ。とても船を出すことさえできない。

「でもどうするつもりですか。悠君が事件を解決させると言うなら足は海の底ですよ」

「代わりが届く手はずよ。それも今向かってきているわ、台風と一緒にね」

微笑む笙子の前で携帯電話が鳴った。丸い卓袱台の上で震えて小さな地震のように揺らした。黒のメタリックカラーの二つ折り型。鈍く光り青いデジタルモニターが相手の名前を表示していた。

「どうしたの」

携帯電話を手に持つと開いた。名前も告げずに言った。

「悠の電話がおかしい。なにかあったの」

笙子には誰からの連絡がわかっていた。穏やかというよりはあまりにも冷静すぎる声だった。まるで氷のような冷たい刃物みたいな音で女、時雨は言った。

「鳴らなくて当然よ。海に落つことしちやっただから」

「あれほど気をつけるといったのに……悠は？」

「寝てるわ。起きたら連絡させましょうか？」

しばらくの無言の後「しなくていい」と告げて通話が途切れた。

笙子は耳元から電話を離して液晶の画面を見る。待ち受け画面へと変わった液晶には黒い髪をした背の高い男と一緒に映った彼女がいた。まだ笙子は幼く学生服を着ている。男のほうは片目を隠すように長く伸びた髪をしていた。

「例の？」

その問いに頷いてみせる。

「あの子も心配なら来ればいいのに」

「確か今日は定期検診ですよ。先輩達も言っていました」

あつと思いついて八八八と笑う。笙子の周りには三人の協力者が集っている。一般的な魔術師として普通。一人は二階で寝ている長瀬悠、さっきの電話をかけてきた冷たい印象を与える女、時雨。そして最後はここへと向かっている織戸慧。全員、魔術師ではない。しかしながら彼女のサポートを確実にこなす者達である。

ただ一人、時雨だけは別である。彼女は人ではない。関西魔術連盟から定期検診を常に受けることを約束に行動を許された人外の類である。

「イザナギのレポートでは悠君はいつもこういった意識障害に陥るようですね」

彩は再びパソコンを広げていた。モニターには長瀬悠のデータが映し出されている。その一箇所、彼女の言う通りで事件の途中で大半、悠は気を失っているという報告が記されていた。特に今回のようなケースでは必ずといっていいほど。

「私、今回笙子さんと仕事をするって聞いて悠君のレポートを見て思っただけです。この子は危ないって……笙子さんはいつも傍にいて大丈夫だと確信されているのかもしれないがあまりにも」

「危険よ」

言葉を先に言う。彩の表情は険しい。解っているなら止めると言いたげな顔をしていた。悠の担当した事件のレポートを見れば皆同様に彼は異常だと云うだろう。事実、これまで協力にやってきた関係者たちはそう言ってきた。事件に関わる度に何をしているのかと問う連中も多い。しかし笙子はその度に問題はないと言ってきた。答えは簡単だった。

「彩ちゃんは奏者の仕事が何か言えるかしら」

「当然です。土地神に音を届けてその力を静める。魔の怪物たちを

音によって浄化する」

キーボードから手を離していた。

「合ってる。けどそれだけじゃ足りないわ」

首を傾げる彩。現代の魔術師の傍には必ず協力者がいる。その協力者が同じ魔術師であるかどうかは別だが個人で動く者はいないだろう。関西にいる数百の魔術師たちも皆、笙子と同じように誰かと手を組んでいる。

「あの子はね、他の奏者とは違うのよ。奏者の力は何か知ってる？」

「楽器です。それぞれの持つ楽器により音を奏でて力を具現化する術者ですから」

「悠はギターを使用して音を鳴らす。奏者の仕事はさつき彩ちゃんと言ったとおり、土地神の穢れを浄化することや妖魔の浄化にあるわ。相手の魂が何であれ完全に消滅……つまり浄化することに意義を持つ。いわば鎮魂の音色ね。悠が他の奏者と違うのはその場に残った思念や魂なんかも自分の魂の波長と合わせられるの」

「そんなデータ載ってませんよ」

モニターに表示されている長瀬悠のプロフィールにはやはり書いていなかった。

「載せる必要がないからね。で、靈感……いえ自然と同調する事ができる能力。だから人間の魂さえ観る事ができる」

「その力は知ってます。随分昔にもいたって聞きますよ。特別強い力を持つて生まれる人がいるって……」

「魔術師だけが特別じゃないのよ。魔術師ってほんの僅かな素質があれば誰でもなれるのよ。奏者は違う。先天的な力は産まれたときに決まっちゃうから」

少年の身体と心が傷つきながらも成長していく様を笙子は隣りで見てきた。その瞳にはある男の姿が覆い被さったように悠の姿と酷似している。

「で、その力を持っていたってという人は長瀬律」

一人の男の名前を口にした。

「あの子が危険に身を投じているのは解ってるわ。でも誰かにしろと命令されてやっているわけじゃない。あの子は父親の言葉を守ってるだけよ」

彩が悠のプロフィールを次へと移した。その頁にこれまでの経歴が全て記されている。もちろんその中には笙子が悠を引き取った日付も載っていた。

「悠君には父親はいないはずですよ。保護者は……長瀬律となってますが彼とは血が繋がっていません」

「そこよ。血の繋がりなんていらなのよ」

長瀬律は身元引受人であり父親ではない。悠は捨て子、親知らずである。まだ赤ん坊だった頃、ある教会の前に捨てられていた。幸か不幸かその教会はこちら側の世界と繋がりがあり悠は授かった力とともに進む道を決められたのだ。

奏者としての素質がなければどうなっていたか解らない。

「そ、それは笙子さんと同じ……ということでしょうか」

「私の場合は感謝ね。私が高校を卒業するまで大事に育ててくれたことへのね」

彼女もまた同じようにして育った一人である。親がいてもその人に育てられるかは必ずではない。笙子を育てた人物は親ではない。

「悠の大事にしているものはそんなものじゃないわ。もっと根本的な根源にある。つまり魂の浄化。自然への回帰とでも言うのかしらね」

「わたしには解りません」

モニターの中の悠は無表情で冷たい瞳をしていた。

「彩ちゃんも悠のギターを聴けばすぐにわかるわ。どれほどあの子がどういう子かということ。さて慧に連絡しなくちゃね。何所まで来てるのかしら」

再び携帯電話を手にとるとメモリーの中から織戸慧という名前を呼び出す。携帯のメモリーはすでにいっぱいになる手前まで記憶されていた。グループ別に別けられたメモリーのなか慧の名前は長瀬

悠と同じ場所にあった。

第一章六話

悠が膝から下を無くしたあの日からまだ半月ほどしか経っていない。それなのに面倒なことになった。義足の注文は金が掛かった。数少ない奏者を危険に晒し肉体の一部を破損させたことは事務所設立を遠ざけた。時雨という強力な仲間が加わったが彼女も気ままに動く。笙子の目的は指の隙間をすり抜けるように遠退いたのだ。

今回注文した義足は海底に沈んだ物とは全く違う。単なる足の代わりではなく戦闘用のもの。連盟の所有する技術と魔術の結晶。一般家庭で普及しているような代物とは違っている。単なる物体として活動するのではなく、文字通り身体の一部として活動する。身体に装着した時点で痛覚、触覚も働きだす。地を踏めばその感触は脳へと伝わるし、切られれば血は出ないが痛みは感じる。本当に身体の一部として機能を果たす。

そうした義肢を作っているのは笙子と同じ魔術師である。

魔術師の本分は戦闘にあらず。

魔術とは人為的に奇跡、神秘といった非科学を行使することにある。隣りでパソコンを自由気ままに操っているのとは訳が違う。使うものは自然界に存在する力と魔術式。それらを駆使することで火を燃やし風を起こす。時が経っても基本は変わらない。奏者の持っている先天的な力ではなく、ほんの少しの才能と努力である程度のところまではいける。笙子自身がその例である。

そんな中、稀に「正に是」という才能に長けた人物が現れる。イザナギで義肢を製作している魔術師は世界有数の魔術師である。協力者の一人、織戸慧は直接イザナギとは関係ないが京都にある本部と繋がりある家柄から彼やそのほかの魔術師と面識があった。普通ならば世界有数の魔術師と直接会うことなど到底不可能だ。その会う事さえ困難な者達は自分の工房となる事務所の設立を早くに行い独立している。そしてその事務所の場所は内密にされている。

魔術師が方々へ必要な物を新生する場合、自分の所属する団体へ依頼書を送る。団体、笙子の場合イザナギだがそこから今度は連盟本部へと送られる。手間がかかるという意見もあるが古くからそういった仕組みになっているのだから仕方ない。でも時間がかかる事は無く即座に行動に移るため各方面へ連絡が伝わるのは一瞬だ。この辺りは科学万能の時代の進化が全てである。

今やメール、電話、動画、なんでもありとなっている。すでに現代の一般市民はその機器を手足のように使用できる。使い魔に手紙を持たせて走らせるなんて時代錯誤はない。

イザナギへ新しい義足を発注したのは随分前になる。現在、完成した一品は慧が運んでいる最中だ。台風よりも速く走る彼女のバイクに乗せられた物に期待と不安が募るなか電話をかけた。

「おかしいわね、出ないわ」

「運転中なんじゃないですか」

いつまでたつても通話にならない。バイクの運転中なのは知っていた。だがいつもなら路肩に停めてすぐに対応するはずだ。特に笙子からの着信なら呼び出している織戸慧は喜び勇んで受け取るというもの。しかし電話は留守電となってメッセージ録音へと変わる。

なにもそこまでするほどでもないと言電話を切ると山の坂道からけたましいエンジン音が響いてきた。

雨音をかき消す獣のような音は大型バイクのものだとすぐはつきりとする。慧の乗っているバイクとは違う。もっとバイク自体の精度が根本から違う精密機器の骨が鳴らす音。笙子の耳には聞き覚えのない音だった。砂利に足をとられる事もなく登って来たのは赤と黒のカラーで塗装されたバイク。至るところにBMWのマークが入っている。

バイクには黒いヘルメットとライダースーツを着込んだ運転手が乗っていた。その後部には無理やり括りつけた荷物が青いビニールを纏って風に揺れている。バイクは縁側に停まるとなんとか雨から身を防ぐ事が出来た。

「遅くなつたか？」

ヘルメットの奥で黒い瞳が動く。棘のように刺さりそうな目をしている。ヘルメットを脱ぐと肩にさえ掛からないショートのが髪が現れる。また適当に切つたんだろうなと笙子はその形を見て思う。

「早いくらいよ、慧」

「急がせたのは笙子だろ？ まったく夜通しぶっ飛ばしてきたんだ、感謝しろ」

外見とは正反対のぶっきらぼうな言葉使い。男のように話す彼女はライダースーツの胸元部分を開く。随分長い間、走っていたのだろうじんわりと汗をかいていた。バイクの後部にあるブルーシートの箱を縛っていた紐を解いた。

「また新しいバイク……それもBMW……」

「親父からの贈り物だ。オレが買ったんじゃない」

不貞腐れるように言うがバイクは紛れもなく新品そのもの。雨のなかを走っていたため濡れているがまだ新しい部品の数々は光り輝いて眩いばかりだ。一台の車をずっと乗り続けている笙子とは全く正反対で愛車へのこだわりはない。

「それよりも、だ。また倒れたみたいだな。何回目だよ」

「数えてないわってなんで知ってるのよ」

「さっき携帯で見た。そつちの四条が報告したろ」

「そうなの？」と名指しされた彩に向かつて聞くと彼女は首を縦に振った。彼女の報告はインターネット回線によってイザナギへと送られる。イザナギは京都の本部へと報告する。その情報が携帯電話という端末を用いて見る事ができる。

「頼んだものはそれ？」

解き終わるとブルーシートもはがす。差し出された物は木箱。両腕の力をめいっぱいにして持ち上げる。箱を置くと中からごとと金属音にも似た重厚な音がした。

「あいつ……やっぱり向いてないんだよ。こつちの仕事」

「そんな事言つてほんとは悠が心配できたんでしょ。上がって、あ

の子二階にいるわ」

二人で箱を持つ。それでも中身は重く腕が肩から落ちそうになるのを堪える。荷物を持って階段を登る。

「で、あいつは？」

「あいつ……ああ時雨ね。彼女なら定期検診よ」

雲に隠れた太陽によつて海月荘は薄暗い。電気をつけて明るさを保っていた。そよ風が吹いているがそれは何時までかわからない。

そのうち、この海月荘を吹き飛ばさん限りの嵐となる。海の波も時期に激しくなつていくだろう。昼間の暑苦しさはすでに消えていた。

悠の姿を見た慧が「バカ」とつぶやいた。彼女との仲はもう随分と長いものになった。それなのにこの頃はいつもこんな調子で距離を置いている。

二人は悠の傍に箱を置く。

「でも随分と速かつたわね。まさか余つてたやつじゃないでしょうね」

「違うよ、完璧なまでの新品だってさ。なんでも今回の事件で最高に役に立つって豪語してたぜ」

自信満々なその口調は作った魔術師のもの。彼女が言うには義肢製作を行なっている魔術師は頑固なおっさんとのこと。イザナギに所属する魔術師又は関係者の技師をすべて一人で受け持つ職人でもあるが誰も会ったことはないとも笙子は聞いていた。

「おっさんに渡された物だ。間違いなく本物だよ」

箱の蓋を開けると黒い金属の塊が現れる。義足として頼んだ物だったがその中に在る物は足の形をした金属にしか見えない。さつきまで二人で抱えて持ってきたが重さは二十キロ以上はあった。そんなものを寝ている少年が履けるわけがない。

「重くない？」

「おっさん曰く履いたら重さはゼロになるらしい」

義足は冷たい鋼鉄で出来ていた。笙子が触れる。その触れた場所から身体が凍りつくほどの冷気に晒されるようだった。まるで海に

落とした義足がゴミに感じるほどの精巧さを持っていると知る。特に接続部分には魔力の流れをまるで血管のように繋ぐコードが充満していた。これなら悠の力を最大限に発揮させられる。特に霊に掴まれて海に落ちることはなくなるだろう。それにちよっとくらいの攻撃じゃびくともしない。でもこれだけの品物だと値段が気になるところ。

「金だが試作品だから無償らしい」

「ホント！」

笙子の心配を見透かしたように慧が言った。慧がうなずく。こない物があったなんて今回はついてるわとはしゃぐ。こういう時ほど慧のことをありがたく思うことはない。

「今回の事件だけだ」

慧が突然きりだした。腕を組んで窓から外を見ている。窓には大きな姿をした明石海峡大橋がどんと構えている。

「飛び降り？」

慧がうなずく。

「犯人だけと視たぞ。オレならいつでも殺せるけどどうする？」

彩がいつのまにかやって来て慧に茶を渡す。彼女は珈琲を飲まない。家柄なのか洋風の食べ物には手を出さない。茶の香りに受け取った慧は口に含んだ。

「だめよ。あれは悠のためにいるの」

「なんだって悠なんだ？ あんなのバツサリ殺っちまえばいいじゃないか。その後、後ろに隠れてる奴も一刀両断に……なんでもない」

笙子の瞳が慧の言葉を遮っていた。事件の解決という点で言えばこのまま慧が終わらせてしまつのがベスト。何時とも知れぬ悠の回復を待つよりは人が死ななくて良い。見た所、ろくな装備もしていないが刃物のひとつでもあれば事は足りる。それくらいは常備しているだろうからバイクで行ってそのまま大阪へへ行ける位だ。

「海の上よ？」

「問題ないさ、泳げるからな」

でもそれは駄目、と瞳で示す。仕事という名目以上に大事な事がある。悠には一人の男が親として接していた。その男はまだ悠の芽は小さなもので開いてはいないという。魔力のない慧と彩には観えていないが今、悠の周りには胎動する力が渦を巻いていた。その光景を見ているのはたった一人筈子だけである。

「実戦の経験が少ないだけよ。それに今回のような妖魔相手には奏者が一番適任なの。それぐらいは解っているでしょ」

慧は黙って肯いた。

「悠や他の奏者が奏でる曲こそ最高の武器になる。私や貴女の剣なんて適わないわ」

今度は窓の方へと歩いていく。まだ海はゆったりと揺れている。そのうち橋は通行止めとなる。

「特に今回は悠の為になるの。だから慧は手出し無用、良いわね」

「わかったよ。俺もただ暇なだけだし、面白そうってだけだったから気にするな」

海を見ながら返答する慧。彼女は魔術師ではない。悠のように能力者でもない。傍にいる四条彩と何も変わらない。ただの人で他より運動神経が少し良い程度の人間だ。この道を進まなければアスリートになっていただろう。彼女の身体はライダースーツの上からでもはつきりと鍛えられている事が見てとれる。そんな彼女が視たというのは連盟より与えられている専用のゴーグルを使って覗いたにすぎない。霊などの実体を持たないモノを見る事ができるのは限られている。

「でも面白いことを言うわね。いつも面倒だとか何とか言っていて関わることを避ける慧が自分から関わろううなんて」

「なんでもない。ただ暇なんだよ」

頬を赤く染める。暇だ、暇だと口では言ってるが実際はそんなはずはない。今日も台風と共に北上し逸早く駆けつけたのだ。

「それじゃあオレは帰るぞ」

一気に手にした茶を飲みきる。湯飲みを彩さんに返した。私の言

葉に返事はない。

「遊んでいけばいいじゃない。仕事ないんでしょ？ もうじき悠の目も醒めるわ。仕事が終わって一息つくくらいの時間はあるでしょ」
「なにも急ぐ必要なんてない。彼女に仕事はない。笙子の元にやってくる仕事こそが彼女の仕事になるのだから。それにここには海もあれば山もある。観光だけでも暇つぶしにはなる。」

「生憎そんなものに興味がないし俺がここにいるとあいつが怒るだろ」

それだけ言うと慧は部屋から出て行ってしまった。最後、寝ている悠の髪をなでたのは驚きだった。笙子も同じように悠に触れる。

この子を預けた本人は今頃どこにいるんだろうか。私には何も言わないで消えた彼の行方は現在イザナギと学院で調査してもらっているが不明となっている。もう死んでいるのかもしれない。彼に限ってそれはないだろうけど。学院のパレードで聞いた彼の音楽は私の脳裏に焼きついたまま。強烈なイメージと魂を揺さぶる激しさは忘れられない。最後の言葉もはつきりと覚えている。

「悠は俺より奏者としての能力がある。だからお前の力にもなるさ」
彼はまだ幼い悠の事を理解していた。だからこそ私の元に預けたんだ。私はそれに答えるために何事も力で解決するわけにはいかない。少しでも悠のためになるならと事件の解決は悠自身の音楽で終わらせることに意味がある。

「初めて織戸家の方を見ました」

彩さんが言った。古くから続く連盟に織戸の名前は大きく関与している。京都の本部でも織戸家の発言は響く。彼女は産まれた時から定められた人生を歩んでいた。

「あの子も私の仲間よ」

仲間というよりは妹に近いか、とふと思う。あのクールな彼女がその内側を見せるときは仕事の最中ぐらいなもの。バイクのエンジンに命が灯る。爆音をひっさげてバイクは走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5091y/>

幻想組曲

2011年11月20日03時29分発行